

カムチベット語金湯方言における基数詞の形態論的特徴

鈴木 博 之

1. はじめに

本稿では、中国四川省甘孜藏族自治州康定市金湯地区で話されるカムチベット語の3つの方言における基数詞「1」～「100」の形態について、語形式を整理し、チベット文語（以下「蔵文」）形式との対応関係を軸に考察する。

金湯方言とは、四川省甘孜藏族自治州康定市金湯地区（捧塔郷、金湯鎮、三合郷）で話されるカムチベット語方言の総称である。Li & Suzuki (2020) の記述のほか、筆者による特定の音声現象に関する記述（鈴木 2021）がある。筆者は三合郷の昌須村、および邊壩村の方言を記述した。本稿では、これに加えて捧塔郷兩河口方言の資料も含める。兩河口方言については、調査協力者の李春梅氏（四川民族学院）の収集したデータを、その録音に基づいて筆者が再確認し、かつ表記の面で調整したものをを用いる。

2. 金湯方言の音体系

ここでは、音体系を超分節音、母音、子音、音節構造に分けて整理する。本稿で扱う3つの方言の音体系は、手元にある資料に基づくと、超分節音、母音および音節構造は3方言で共通であるが、子音は邊壩方言および昌須方言で1種、兩河口方言で1種というように分かれる。

超分節音は、語声調で4つのパターンが認められ、以下の記号で、語頭に表示する。

ˉ : 高平 ˊ : 上昇 ˋ : 下降 ˆ : 上昇下降

母音については、舌位置による一覧は次のようである。

i	ɯ	ɯ u
e	ə ə	o
ɛ	ɔ	
a	ɑ	

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している。

邊壩方言および昌須方言の子音体系は、以下のように整理できる。

		両唇	歯茎	歯- 後部歯茎	そり舌	硬口蓋 前	軟口蓋 後	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h		t̪ ^h		k ^h	
	無声無気	p	t		t̪		k	ʔ
	有声	b	d		d̪		g	
破擦音	無声有気		ts ^h	ts̺ ^h		tɕ ^h		
	無声無気		ts	ts̺		tɕ		
	有声		dz	d̺		dʒ		
摩擦音	無声有気		s ^h	s̺ ^h			x ^h	
	無声無気		s	s̺				h
	有声		z	z̺				ɦ
鼻音	有声	m	n			ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥			ɲ̥	ŋ̥	
流音	有声		l		r			
	無声		l̥					
半母音	有声	w				j		

歯-後部歯茎破擦音の詳細な調音動作については、鈴木 (2021) を参照。

両河口方言の子音体系は、以下のように整理できる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前	軟口蓋 後	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t̪ ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t̪		k	q	ʔ
	有声	b	d	d̪		g	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h					
	無声無気		s			x		h
	有声		z					ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	ɴ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥		
流音	有声		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有声	w			j			

最大の音節構造（分節音の配列）は次のようである。

^cC_iGVC

このうち C_i (初頭主子音) と V (音節核の母音) が必須であり、C_iV を音節の最小構成とする。^cには前気音及び前鼻音が現れ、G には/w, j/が現れる。兩河口方言の場合、G に/r/が現れることもある。

3. 基数詞の形態

本稿で議論するのは、「1」以上「100」以下の整数の形式である。チベット・ビルマ (TB) 諸語の数詞に関する詳細な記述には、Matisoff (1995) がある。チベット系諸言語における数詞の形態は共通する部分が多く、たとえば「7」の語形は TB 諸語の中でも独自である (Beyer 1992, Tournadre 2005)。一方、10 台の数詞に音韻論的に興味深い現象が見られたり、10 進法か 20 進法かなど、形態論的にも言語間の差異が認められる (Tournadre & Suzuki 2021)。TB 諸語では、数詞に不規則な形態も認められ (Bradley 2005)、チベット文化圏東部におけるチベット系諸言語における数詞の例外的な語彙形式について、Suzuki (2009) が取り上げている。以上のような点に注意しつつ、記述を進める。なお、藏文の表す音価は格桑居冕、格桑央京 (2004:379-390) を参照。

3.1. 「1」～「10」

「1」から「10」までの整数の基数詞は、それぞれ独立した形態素を用いる。

語義	藏文	邊壩方言	昌須方言	兩河口方言
1	gcig	^{-h} tʂi:	^{-h} tse:	[`] ha tʂə
2	gnyis	^{-fi} ɲi:	^{-fi} ɲi:	⁻ ha mə ^{-fi} ɲi:
3	gsum	^{-h} sõ	^{-h} sõ	⁻ ha mə ^{-h} sõ
4	bzhi	^{-fi} ʒə	^{-fi} ʒə	⁻ ha mə ^{-fi} ʒə
5	lnga	^{-fi} ŋɔ	^{-fi} ŋɔ	⁻ ha mə ^{-fi} ŋɔ
6	drug	[^] təw	[^] təw	[^] təw
7	bdun	^{-fi} dē	^{-fi} dē	^{-fi} dē
8	brgyad	^{-fi} dʒɛ:	^{-fi} dʒɛ:	^{-fi} dʒɛ:
9	dgu	^{-fi} gɯ	^{-fi} gɯ	^{-fi} gɯ
10	bcu	^{-h} tʂu	^{-h} tʂu	^{-h} tʂu

兩河口方言の「1」における⁻ha/および「2」～「5」における⁻ha mə/は類別詞のような性質の形態素であると考えられる。日本語の「ひとつ」の「つ」に類似すると考えられ、単に数詞を列挙する文脈にのみ現れる。⁻ha/と⁻ha mə/は独立した要素ではない。類似の例は Suzuki & Sonam Wangmo (2017) が報告する Lhagang (塔公) 方言の^{-fi}do hʈciʔ/「1つ」、^{-fi}do ma ^{-fi}ɲi:/「2つ」のようなものがあるが、これは名詞とともに用いられる場合の形態である。

「1」の形態の中で、藏文 gcig と対応する形態は邊壩方言のみに見られる。藏文の c/ch/j 系列に歯-後部歯茎破擦音が対応するからである。昌須方言および兩河口方言では、*gʈsig とい

う形態に対応するものと考えられる。関連する例については、完瑠冷智(2006)も参照。この形式は蔵文として見られないが、複数の方言で認められる音対応から推定されるものである。たとえば、sKyangtshang(山巴)方言(鈴木2007a)やHamphen方言(寒盼)方言(鈴木2009)、rGyarwagshis(甲拉西)方言などがある。

「1」以外の形式は、すべて蔵文と対応関係を見せる。このため、1桁の基数詞において、特段注意が必要な形式はない。ただし、音対応の面から見ると、兩河口方言の「9」と「10」は文語の母音がuであるのに対し、/u/と/w/という異なりが見られる。また、「5」について、文語で開音節となるaは各種金湯方言で/o/に対応するというのは、方言学上有標な音対応であり、近隣では丹巴県の同一下位方言群に分類されるカムチベット語(Suzuki 2011)、sPomborgang方言群(鈴木2018; 李、鈴木2020)や郷城県諸方言(鈴木2007b)に類似の音対応が認められる。

3.2. 「11」～「19」

「11」から「19」までの整数の基数詞は、「10」を表す形態素を第1音節とし、1の位にくる数詞の形態素を第2音節とした2音節語になる。ただし、音対応が各数詞によって細かな違いが現れる。蔵文形式にも反映されるのが、「10」を表す形態素について、単独ではbcuとなるものがbcoとつづられる現象である。この現象は、1の位にくる数詞の形態素に含まれる母音がaである場合に起こっている。このことから、蔵文成立期(7～9世紀)の文語の基礎となった自然言語にも、特定の母音の性質が周辺の音節にある母音の影響を受けて変化するという事例の例証ということができる。

語義	蔵文	邊壩方言	昌須方言	兩河口方言
11	bcu gcig	^h tse ^h tsi:	^h tse ^h tsi:	^h tɕo: ^h tɕi
12	bcu gnyis	^h tse ^h ɲi:	^h tse ^h ɲi:	^h tɕu ^h ɲi
13	bcu gsum	^h tɕu ^h sõ	^h tɕu ^h sã	^h tɕu ^h sõ
14	bcu bzhi	^h tɕu ^h zə	^h tɕu ^h zə	^h tɕu ^h zə
15	bco lnga	^h tɕɛ ^h ŋɔ	^h tɕɛ ^h ŋɔ	^h tɕo: ^h ŋɔ
16	bcu drug	^h tse ^h ɖu	^h tse ^h ɖu	^h tɕo: tɕw
17	bcu bdun	^h tɕu ^h dã	^h tɕu ^h dã	^h tɕo ^h dẽ
18	bco brgyad	^h tɕu ^h dzɛ:	^h tɕu ^h dzɛ:	^h tɕo ^h dzɛ
19	bcu dgu	^h tɕu ^h gu	^h tɕu ^h gu	^h tɕu ^h gu

各種金湯方言も第1音節の母音が各数において異なる。邊壩方言および昌須方言では/e-e-u-u-ɛ-e-u-u-w/となり、兩河口方言では/o:-u-u-u-o:-o:-o-o-u/となる。この2系列に体系的な対応関係は認めがたく、それぞれの内部で発展したものと考えてよい。

「11」における第2音節(1の位を表す数)が「1」とは異なり、すべての方言で蔵文gcigと対応する形式を用いる。このことは、単独の「1」の形式が特別である可能性を示唆する。兩河口方言では、第2音節の長短の区別が失われる傾向がある。これは「12」や「18」にお

いても確認できる。

「13」について、昌須方言の第2音節の母音が単独の「3」の形式と異なり、舌位置が下がることが指摘できる。

「16」について、邊瀾方言および昌須方言の第2音節の初頭子音が有声化する。類似の音形をもつ方言は、ほかに丹巴県の dGudzong 方言 (Suzuki 2011) や郷城県のいくつかの方言でも見られる (鈴木 2007b)。

「17」について、邊瀾方言および昌須方言の第2音節の母音が単独の「7」の形式と異なり、舌位置が下がることが指摘できる。

「19」について、兩河口方言の形式を見る限り、第2音節の母音/u/の特徴が第1音節の母音に影響したのではないかと推察できる。

3.3. 「20」以上

20以上100以下の数詞については、語形成の観点から1の位が0であるものと0でないものに分けて述べる。なお、以下に示すように、各種金湯方言は10進法であって、20進法ではない。

1の位が0である基数詞は、「100」を除き、基本的に10の位にくる数詞の形態素を第1音節とし、「10」を表す形態素を第2音節とした2音節語になる。ただし、「20」は表面上異なるように見える。蔵文にも現れるように、第2音節は cu と bcu の2種類が認められ、第1音節の末尾子音の有無によって条件づけられているといえる。

語義	蔵文	邊瀾方言	昌須方言	兩河口方言
20	nyi shu	^h ne s ^h u	^h ne s ^h u	^h ne c ^h u
30	sum cu	^h s ^h ẽ h ^h tɕu	^h s ^h ẽ h ^h tɕu	^h s ^h ũ h ^h tɕu
40	bzhi bcu	^h ze: h ^h tɕu	^h ze: h ^h tɕu	^h zə h ^h tɕu
50	lnga bcu	^h ŋa h ^h tɕu	^h ŋa h ^h tɕu	^h ŋa h ^h tɕu
60	drug cu	^h tɕu w ^h tɕu	^h tɕu r ^h w ^h tɕu	^h tɕə w ^h tɕu
70	bdun cu	^h dẽ tɕu	^h dẽ tɕu	^h dẽ tɕu
80	brgyad cu	^h dzɛ: tɕu	^h dzɛ: tɕu	^h dzɛ tɕu
90	dgu bcu	^h gu w ^h tɕu	^h gu w ^h tɕu	^h gu w ^h tɕu
100	brgya	^h dzɔ	^h dzɔ	^h dzɔ

「20」について、兩河口方言の第2音節の母音が/u/となっているのは、音対応の面で「9」と共通する。ただし、「90」の場合、第1音節となる「9」の形態素が/w/となるなど、音対応は単純ではない。一方、邊瀾方言と昌須方言の「60」を見ると、第2音節の母音/w/が第1音節の母音に影響を与えているように見える。そもそもこれらの方言では、「6」の形態素は「6」、「16」、「60」ですべて異なる音声実現になっている。加えて、これらの方言では「70」の第1音節の発音も「7」や「17」の形態素「7」と若干の異なりが認められる。

1の位が0以外の場合の基数詞は、一部の例外を除き、上に述べた10台の数詞の形式を2

音節形式の第1要素とし、1音節の「つなぎの形態素」を第3音節とし、1の位にくる数詞の形態素を第4音節とした4音節語になる。

語義	蔵文	邊壩方言	昌須方言	兩河口方言
21	nyi shu rtsa gcig	ˈŋe s̺ʰu -h̺tsa h̺tɕi:	ˈŋe s̺ʰu -h̺tse:	ˈŋe s̺ʰu -h̺tsa: h̺tɕi
32	sum cu rtsa gnyis	ˈs̺h̺e h̺tɕu -h̺tsa: ʰŋi:	ˈs̺h̺e h̺tɕu -h̺tsa: ʰŋi:	ˈs̺h̺u h̺tɕu -h̺tsa: ʰŋi:
43	bzhi bcu rtsa gsum	ˈʰze: h̺tɕu -h̺tsa: h̺s̺o	ˈʰze: h̺tɕu -h̺tsa: h̺s̺u	ˈʰzə h̺tɕu -h̺tsa: h̺s̺o

つなぎの形態素は、金湯方言では20以上となるすべての10の位で蔵文 rtsa との対応形式を用いるが、蔵文と各種方言では10の位に従って異なる形態も用いられる。前者の特徴は主に雲南のカムチベット語に見られ(鈴木2007a, 2009)、分布の面で金湯方言は特徴的である。

この点を考えると、昌須方言の「21」および20台の数詞は、つなぎの形態素をもたない点において特異であると言える。もちろん、少数ではあるが、他のチベット系諸言語にも見られる特徴である(鈴木2011など)。

4. まとめ

本稿では、カムチベット語金湯方言の基数詞の形態について、若干の特徴を分析した。形態論的特徴を見ると、3種の金湯方言の中で、邊壩方言および昌須方言で1種、兩河口方言で1種と分かれるように見える。また、各種金湯方言と蔵文形式との対応から見た特徴的な形式は、他のチベット系諸言語の中でも認められるものがあることも指摘した。

邊壩方言と昌須方言が1組、兩河口方言がもう1組と分かれるのは、2節で紹介した音体系にもあてはまる。金湯方言の内部にも下位分類が存在するのは事実であり、今後地点を詰めて調査することで異同を明らかにする必要がある。

付記

本研究に際しては、2017-2020年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」(研究代表者:鈴木博之、課題番号17H04774)および2018-2020年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」(研究代表者:遠藤光暁、課題番号18H00670)の援助を受けている。

参考文献

- 鈴木博之(2007a)「川西民族走廊・チベット語方言研究 チベット語方言分類語彙資料集」京都大学博士論文別冊資料 doi: <http://doi.org/10.14989/doctor.k12734>
- 鈴木博之(2007b)「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』第36号17-26 URI: <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045548>
- 鈴木博之(2009)「川西民族走廊・チベット語方言分類語彙集」長野泰彦編『チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とジャンシュン語の解説(No. 16102001)研究成果報告書』Vol.2, i-xxii + 1-457 国立民族学博物館 URI:

<http://hdl.handle.net/10502/4342>

- 鈴木博之 (2011) 「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』3, 1-35 URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000837/>
- 鈴木博之 (2018) 〈理塘県及其周邊藏族語言現狀調查與分析〉《民族學刊》第2期 35-44+106-109 doi: <http://doi.org/10.3969/j.issn.1674-9391.2018.02.005>
- 鈴木博之 (2021) 「 ts^h / ts / dz : チベット系諸言語における歯-後部歯茎破擦音」池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の音声現象』(印刷中) 京都大学人文科学研究所
- Beyer, Stephan V. (1992) *The classical Tibetan language*. State University of New York Press.
- Bradley, David (2005) Why do numerals show ‘irregular’ correspondence patterns in Tibeto-Burman? Some Southeastern Tibeto-Burman examples. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 34.2, 221-238. doi: <https://doi.org/10.3406/clao.2005.1736>
- Li, Chunmei & Hiroyuki Suzuki (2020) Affricate series in Jintang Tibetan (Darmdo Municipality, Sichuan). *Kyoto University Linguistic Research* 39 (in press). <http://hdl.handle.net/2433/57301>
- Matisoff, James A. (1995) Sino-Tibetan numerals and the play of prefixes. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 20.1, 105-252. doi: <http://doi.org/10.15021/00004192>
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan. In Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*, 71-96. National Museum of Ethnology. doi: <http://doi.org/10.15021/00002558>
- Suzuki, Hiroyuki (2011) Phonetic analysis of dGudzong Tibetan: The vernacular of Khams Tibetan spoken in the rGyalrong area. *Bulletin of National Museum of Ethnology* 35.4, 617-653. doi: <http://doi.org/10.15021/00003880>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017) Additional remarks on counting ‘one’ noun in Lhagang Tibetan. *Studies in Asian Geolinguistics VI — “Means to Count Nouns” in Asian Languages—*, 56-59. URI: https://publication.aa-ken.jp/sag6_count_2017.pdf
- Tournadre, Nicolas (2005) L’aire linguistique tibétaine et ses divers dialectes. *Lalies* 25, 7-56.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (2021) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelles for the cartography). CNRS Éditions.
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社
- 李春梅、鈴木博之 (2020) 〈康定市吉居藏語所屬問題〉《民族學刊》第5期 102-109+154-156 doi: <http://doi.org/10.3969/j.issn.1674-9391.2020.05.013>
- 完瑪冷智 [Pad-ma Lhun-grub] (2006) 〈藏語數詞的語音變化〉《民族語文》第4期 39-40